

沖森卓也編

日本語史

あさひ

沖森卓也編

日本語史

執筆者

沖森 卓也（立教大学）
金子 彰（東京女子大学）
近藤 泰弘（青山学院大学）
久保田 篤（成蹊大学）

日本語史

1989年3月10日 初版1刷発行
2010年10月25日 初版24刷発行

定価はカバーに表示
してあります。

編 者 沖森卓也
発行者 坂倉良一
発行所 おうふう
東京都千代田区猿樂町1-3-1

郵便番号 101-8340 振替 東京 00140-2-665242
電話 東京（03）3295-8771（営業）
3295-8774（編集）

印刷 株式会社
著者との了解により検印省略

ISBN978-4-273-02288-4 C1081
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

『日本語史』

目次

第一部

はしがき

奈良時代までの日本語

平安時代の日本語

鎌倉時代の日本語

室町時代の日本語

江戸時代の日本語

明治以後の日本語

第二部

はしがき

文字史

音韻史

文法史

待遇表現史

語彙史

文章文体史

言語生活史

第三部

はしがき

位相語の歴史

言語変化とその要因

日本語と外国語

引用文献及び参考文献

付
録

日本語史資料

稻荷山古墳鉄剣銘／法隆寺薬師仏
像銘／日本書紀／万葉集／宣命／
万葉仮名文書／讃岐国戸籍帳端書
へ有年申文／古今和歌集／更級日
記／類聚名義抄／和泉往来／下官
集／恵信尼書簡／阿豆河庄上村百
姓等言上状／平家物語／仮名文字
遣／風姿花伝／倭玉篇／天草版伊

165

曾保物語／曾根崎心中／和字正濫
抄／浮世風呂／和英語林集成／浮
雲

日本語史年表

平仮名字体表

片仮名字体表

重要事項索引 付用語解説

188 185 182 177

凡 例

一、本書は、大学、短大、およびそれに準ずる機関における講義の際のテキストないし参考書として、また、日本語に関心のある一般の方々の教養書として編集したものです。

一、本書は大別して、各時代の日本語を概説した第一部と、各研究分野ごとに日本語の歴史をまとめた第二部、およびそれらを補説する第三部とからなっています。

一、書名は『』の記号を用い、論文の引用ならびに参考文献は巻末に項目ごとに一括して掲げました。

一、原則として西暦年を掲げ、必要に応じて邦暦年を示しました。

一、本文の記述を補うために、巻末に、日本語史資料・日本語史年表・仮名字体表・重要事項索引（簡単な解説を付してあります）を付録として収めました。

一、次の項目の執筆については、次の方々に協力を仰ぎました。

金子 彰（鎌倉時代の日本語・文字史・位相語の歴史・言語変化とその要因（編者と共同執筆））

近藤泰弘（平安時代の日本語・明治以後の日本語・文法史・待遇表現史）

久保田篤（室町時代の日本語・江戸時代の日本語・文章文体史）

『日本語史』

目次

第一部

はしがき

奈良時代までの日本語

平安時代の日本語

鎌倉時代の日本語

室町時代の日本語

江戸時代の日本語

明治以後の日本語

第二部

はしがき

文字史

音韻史

文法史

待遇表現史

語彙史

文章文体史

言語生活史

第三部

はしがき

位相語の歴史

言語変化とその要因

日本語と外国語

引用文献及び参考文献

付
錄

日本語史資料

稻荷山古墳鉄劍銘／法隆寺藥師仏

像銘／日本書紀／万葉集／宣命／

万葉仮名文書／讃岐国戸籍帳端書

〈有年申文〉／古今和歌集／更級日

記／類聚名義抄／和泉往来／下官

集／恵信尼書簡／阿豆河庄上村百

姓等言上狀／平家物語／仮名文字

遣／風姿花伝／倭玉篇／天草版伊

165

曾保物語／曾根崎心中／和字正濫
抄／浮世風呂／和英語林集成／浮
雲

日本語史年表

平仮名字体表

片仮名字体表

重要事項索引 付用語解説

188 185 182 177

第一部

【第一部 はしがき】

日本語は、時の流れにともなうて様々に変化してきています。こうした日本語の言語変化を明らかにするのが日本語史です。

日本語の歴史は、様々な観点からいくつかに時代区分できます。本書では、通行の時代区分に従って、奈良時代まで（～七九四）・平安時代（七九四～一九二）・鎌倉時代（一九二～一三三三）・室町時代（一三三三～一六〇三）・江戸時代（一六〇三～一八六七）・明治以後（一八六八～）の六つに分けて概説してあります。このほか、日本文学史の区分に応じて上代（奈良時代まで）・中古（平安時代）・中世（鎌倉室町時代）・近世（江戸時代）・近代（明治以後）の五つに時代区分したり、その言語的特徴から大別して、古代（～一三九二）南北朝時代まで）・近代（一三九二～）の二つ、または古代（～一〇八六）・中世（一〇八六～院政時代から）～一六〇三）・近代（一六〇三～）の三つに時代区分したりすることもあります（ただし、院政時代と南北朝時代の扱いには諸説あります）。いずれにせよ、社会の変動にともなうて新しい文化が発達し、言語も変化すると言えましょう。

それぞれの時代の日本語を体系的に記述するための資料としては、主として、日本語そのものを、もしくは日本語について記した文献が用いられますが、それらは文化の中心地のものであることが多いことから、記述の対象となる言語は共通語または共通語のような性格をもつものに偏ることを免れず、日本各地で展開されてきた言語については明かにしたい面があります。更に、性別・年齢・職業・階級・場面などの違いによる言葉の差異も軽視することができません。その点で、今後の究明に待たれる問題も少なくありません。

奈良時代までの日本語

日本語がどのような系統の言語であるか、現在でもよく分かりません。世界の言語は、音韻・文法・語彙などの構造上の親縁関係から、同系統に属する言語群としてセム語族、インド・ヨーロッパ語族、ドラヴィダ語族などいくつかの語族が証明されていますが、日本語の位置づけはいまだに明確にすることができないのです。

日本列島にはきわめて古い時代から人が住み着いていて、少なくとも後期旧石器時代（約三万～一萬年前）に住んでいた人たちは現代日本人の祖先であると考えられています。縄文時代（約一萬年前～二千三百年前）には、最盛期（縄文中期）の人口は三〇万人に近かったと推定され、その縄文人の身体特徴は南方アジア的であると言われています。約三五〇〇年前から始まっていた気温の低下を背景として北方アジア人が南下し、こうした移動がやがて日本列島にも及んで、弥生時代（紀元前三世紀～三世紀）になると、大陸から主に朝鮮半島を経由してかなり多くの人が渡来しました。そして、渡来人は水稲耕作と金属器製作という新しい文化をもたらすとともに、弥生人の身体特徴に北方アジア的な影響を及ぼしました。その影響は西日本に強く、東日本や南西諸島には弱いようですが、こうして、土着系と渡来系の相異なる形質を持つ人たちが日本列島に入り混じって共生するようになったのです。

このような日本列島人のルーツと日本語の系統とは無関係ではありません。日本語を他の諸言語と比較すると、原則として開音節であること、語彙に共通性が見られること、例えばクチヘロ・イヲヘ魚と、ポリネシア語派サモア語 *gutu*、インドネシア語派ジャワ語 *luruk* とが同源である可能性があることなど、南方語の要素が見られる一方、*r* で始まる語がないこと、母音調和があること、接尾辞（助詞）をつけること、目的語を動詞の前に置くこと

など、北方のアルタイ諸語（モンゴル語、トルコ語など）の要素をも持っているのです。こうした言語の特性は、前に述べた身体特徴とびつたり符合しています。すなわち、南方系の基層、これにもいくつかの層が考えられるでしょうが、それに北方系の渡来人の波が押し寄せた結果、東アジアの孤島である日本列島において、いろいろな言語の特性をとけこませた独自の言語が形成されていたと想像されるのです。そのような弥生人の言語が日本語の原型であると考えられますから、日本語をある特定の語族に分類するのは困難なのです。

縄文時代の集落は孤立性が強く、ムラによって言葉にかなりの違いがあったとも想像されます。弥生時代になって、稲作を契機に共同体が形成され、ムラからクニへと成長し、生産力の増大にともなって強大な権力を持った王が次第に他を服従させていくと、各地の言葉もそれぞれの方言的特徴を残しながらも、次第に有力な地方の言葉に同化、吸収されていったと考えられます。そして、畿内を支配していた大王が大和朝廷を樹立し、日本を広く支配するに及んで、奈良地方を中心として話されていた言語が中央語の位置を占めることとなりました。紀元一年頃の日本の人口は三〇万人、四〇〇年頃には一五〇万人であったと推定されています。

三世紀の中国の歴史書『魏志』倭人伝条には、倭国の地名、官職名、人名が見え、「卑狗」「卑奴母離」という表記は「日子（彦）」「夷守」の意で、倭国語は日本語の一祖先であると考えてよさそうです。国内の資料では、『稻荷山古墳鉄剣銘』（四七一年）や『江田船山古墳太刀銘』（五世紀後半）などが最も古いものです。特に前者は、一字一音の固有名詞の表記が多数見られ、当時既に中央の勢力や文化が東日本にまで広まっていたことを示しています。

六世紀までの日本語は資料に乏しく断片的にしか知ることができませんが、推古朝（五九二―六〇二八年）頃からはまとまった資料が残されていて、その時代の言語の構造を記述できるようになります。従って、推古朝以降、奈良時代の末までの七、八世紀の日本語を上代語と言い、六世紀以前の日本語を文献時代以前の日本語（原始日本語）もしくは

は史前日本語などとも」と言つて、区別することがあります。

奈良時代までの文献はすべて漢字で記されています。中国語を表記するための文字である漢字がいつどのように伝来したかはよくわかりませんが、四世紀後半から五世紀にかけては朝鮮半島との交渉も深くなっていたようですから、この頃には漢字による日本語表記が行われていたと考えられます。この時期の書記は主として朝鮮半島からの渡来人で、彼らは後に史部^{カトベ}として朝廷の文書を司るなど、漢字移入に大きな役割を果たしました。当初は、書き記すべき内容を中国語つまり純粹の漢文で綴り、それを中国語音で読んだのでしょう。一方、漢字漢文の意味を理解するために日本語に翻訳することも次第に多くなった結果、そうした翻訳に用いた日本固有の語(和語)と一定の漢字とが固定的に結びついて訓^{クン}の用法が成立しました。更に、漢字を意味とは無関係に、その音や訓の音声面だけを借りて日本語の音節表記に利用する万葉仮名も確立されました。こうして、日本語は、巧みに漢字を用いて文字に書き表す手段を獲得し、『法隆寺薬師佛像銘』(六〇七年)などを始めとして、奈良時代には『古事記』『日本書紀』『万葉集』などが著されるようになりました。律令国家となった八世紀には、識字層は僧侶や支配階級の人たちだけでなく、下級役人や大工にまで及んでいます。

また、万葉仮名を通して奈良時代の音韻体系を知ることができます。奈良地方の中央語で当時区別された音節を五十音図にあてはめると、ヤ行のイとワ行のウを除いて、濁音の行も含めすべてが埋まり、更にキ・ケ・コ・ソ・ト・ノ・ヒ・ヘ・ミ・メ・ヨ・ロ及びその濁音ギ・ゲ・ゴ・ゾ・ド・ビ・ベの一九の音節(『古事記』ではモを加えて二〇の音節)に、もう一つ別の音節がそれぞれ区別されていたのです。例えば、ミ(三・御)やカミ(上・髪)のミには「美・弥・見」などを、ミ(身・実・箕)やカミ(神)のミには「未・微・味」などを用いるというように、万葉仮名が二類に使い分けられていました。このような万葉仮名の使い分けを「上代特殊仮名遣」と言い、それぞれ甲

類、乙類と呼び慣わしています。この区別は発音上の差異に基づくものと見られ、その差異を母音の違いに求める説が広く唱えられています。その場合、ア段・イ段甲類・ウ段・エ段甲類・オ段甲類の母音は現在とほぼ同じ [a] [i] [u] [e] [o] であろうとされていますが、それ以外については諸説があり、イ段乙類は [ɛ] [ɪ]、エ段乙類は [æ] [œ] [ɐ] など、オ段乙類は [ə] [o] などと推定されています。子音については、カ・ガ・ナ・マ・ヤ・ラ・ワの各行は [k] [g] [n] [m] [j] [r] [w] で、タ・ダ行は [t] [d] であって、現代のチ・ツのような子音の揺れはなかったと考えられています。サ行はサが [s]、シ・セは [ʃ] または [ʃ]、ス・ソは [s]、ザ行はそれぞれの有声音 [ɰ] [ɰ] [ɰ] [ɰ] が考えられていますが、定説には至っていません。ハ行の子音は両唇摩擦音 [ɸ] であり、さらに奈良時代より古くは両唇破裂音 [p] であつただろうと言われています。なお、バ行は [b] であつたようです。撥音・促音・拗音は日本語の音韻としてはまだ認められず、当時の日本人によって発音される漢字音も中国原音に近かつたと考えられています。

清音六〇(『古事記』では六二)、濁音二七の音節が区別されていて後世より音節数が多かったのですが、音節結合には制限がありました。オ段乙類音は同じ語の中でオ段甲類音・ウ段音・ア段音と共存することがないという「母音調和」(ウ段音・ア段音については若干の例外がある)と、母音だけの音節は語頭以外には立たない、ラ行及び濁音は文節の初めに立たないという「頭音法則」です。母音だけの音節は語頭以外、つまり語中・語尾には位置できないものですから、複合語を構成して母音が連続する場合に、その一方の母音が脱落するか、連続する二つの母音が別の一つの母音に変化するかしました(ワガイモ↓ワギモへ我妹、ナガイキへ長息↓ナゲキへ嘆き)。この他、母音が交替する現象があつて、例えば、アマゴモリ(雨隠り)とアメ(雨)のように、アマは他の語が接して一語となる形であつてこれを被覆形と呼び、アメはそれ自体で単語として用いられるものでこれを露出形と呼んでいます。この

ような母音交替は、形容詞語幹「あか（赤）」と名詞「あけ（明け）」・動詞「あけ（明け）」などに見られるように、語構成だけでなく語の派生にも関係するものです。

文法では、動詞の活用は下一段活用がなく、「蹴る」は「蹴散」に対する訓注に「俱穢^{くま}簸^は邏^ら箇^か須^す」（『日本書紀』）とあるように、「くう」という下二段活用でした。活用の種類には後世と異なるものもあり、「生^いく」「帯^おぶ」などは四段に、「隠る」「忘る」などは下二段のほか、四段にも活用しました。連体形の体言的用法（準体句）はあまり見られず、已然形は接続助詞を伴わずに確定条件を表しました。四段活用の已然形と命令形はカ・ガ・ハ・バ・マ行ではそれぞれエ段乙類音、エ段甲類音であり、音韻上区別がありました。形容詞は、語幹が独立的な用法を持っていて、活用語尾は付属語的でした。未然形・已然形には「孤悲思家武加母（恋^{こひ}しけむかも）」（万葉集・三九九五）、「等保家騰母（遠^{とほ}けども）」（万葉集・三九八一）のように「け」「しけ」という活用語尾があり、係助詞「こそ」の結びは「己妻許増常目頼次吉（己^{おの}が妻^{つま}こそ常^{とこ}めづらしき）」（万葉集・二六五一）のように連体形であって（「終止形+も」で結ぶこともありました）、動詞に比べると活用の整備が遅れていました。補助活用のカリ活用は、連用形にアリが下接したものが「-ku・ari→-kari」というように母音脱落して「可奈之可利家理（悲^{かな}しかりけり）」（万葉集・七九三）などとなったもので、いろいろな助動詞や助詞に付くことができました。また、活用語を体言化する「ク語法」や、形容詞の語幹にミが接して理由や根拠などを表す「ミ語法」なども上代特有のもので、活用語尾の音便形はまだ見当たりません。一方、形容動詞は十分に発達していませんでした。助動詞では受身・自発などの「ゆ」「らゆ」、打ち消し推量の「ましじ」（平安時代には「まじ」）、継続の「ふ」、尊敬の四段活用の「す」などがあり、接続や活用形にも後世には用いられないものもありました。助詞についても、格助詞の「つ」「な」「ゆ」「ゆり」「よ」、係助詞の「なも」（平安時代には「なむ」）、副助詞（格助詞とする説もある）の「い」、間投助詞の「ろ」「ゑ」など特殊なものがありま

した。待遇表現はかなり発達していて、敬語動詞に既に補助動詞としての用法もありました。ただし、丁寧語はまだ発達していなかったようです。

語彙は、日本固有の語(和語)が多いことは言うまでもありませんが、漢語や梵語なども日常生活の中で次第に使用されていくようになりました。漢語からの「梅」「馬」「菊」、朝鮮語からと言われる「寺」、漢語を経由して取り入れられた梵語起源の「瓦」などは既に日本語化していたと考えられます。語に対する雅俗の意識もあって、「つる」に対して「たづ」「かへる」に対して「かはづ」は雅語として意識されていたようです。また、男女の別によって使用する語に違いも見られ、例えば「君」は原則として女性が男性を指すのに用いられました。ただ、残されている資料が韻文中心であるため、日常的にはどれくらいの語が使用されていたか明らかではありませんが、『万葉集』では語の認定の仕方によって多少違うでしょうが、約七四〇〇語を数えることができます。

『日本書紀』などに見られる純漢文の他、日本語的な要素の混ざった変体漢文(和化漢文)、日本語の語順のままに活用語尾や付属語を万葉仮名で右寄りに小さく書く宣命体、万葉仮名だけで書き記す万葉仮名文などの諸文体が見られました。文字で言葉を定着させる場合、その書き言葉はいつの時代でも話し言葉と多少違うでしょうが、この頃はまだ後世ほど明瞭な区別がなく、恐らく話し言葉のままに書き綴ったと考えられます。

資料的制約上、主として知られるのは奈良地方を中心とした、しかも主に貴族階級の言語であって、そのうえ韻文に偏っているのですから、八〇〇年には四〇〇万人と推定される人口のうちの、非常に限られた位相の言語しかわかっていないのです。従って、例えば平安時代の言語と比較する時などは、その点に十分留意する必要があります。中央語以外の方言については、『万葉集』巻一四の東歌や巻二〇の防人歌を通して東国(北陸を除く長野・静岡以東の本州)の方言が知られますが、それは奈良地方の言葉とはやや異なった体系を持っていました。